

●鮮やかな色彩で描く

毎年盆の八月十六日、北浦町で港祭りが行われる。祭りの会場古江港には夕方になると、市振や宮野浦など町内の漁港から集魚灯をともし、たくさんの大漁旗を飾った漁船が次々と入港、祭りを盛り上げる。

北浦町は、一九三五（昭和十）年ごろからきんちやく網漁が盛んになった。きんちやく網漁は夜に漁をして昼帰る。大漁のときは大漁旗をなびかせて帰った。大漁旗を掲げた船が沖に見える、港で待つ人々は喜び、水揚げの手伝いも力が入ったという。

現在は漁獲量を漁場から無線で知らせるので、大漁旗を掲げて帰港することはなくなったが、漁師にとって大漁旗は大切なものである。新造船の船下ろしには兄弟や親せき、知人を招いて安全と豊漁を祈る。神事後、船を大漁旗で飾りたて、湾内を左回りで三回回る。また、正月

二日には大漁旗を飾り、船霊にお神酒と刺し身を供え、その年の豊漁と航海安全を願って乗り初めをする。

進水式や乗り初め、大玉祝い、大分県蒲江の薬師様参り、港祭りなど祝いに大漁旗は欠かせない。兄弟や親せきなどが贈り、どの船も五枚から十枚は大漁旗を持っている。

同町古江の吉田儀男さんは大漁旗をつくる伝統的な染物の技法を今に伝える三代目。技法はシブ紙の筒に入れたのりで描くもので、「筒描（つつがき）」という。八九（平成元）年、県の伝統工芸士に認定された。

初代は漁師の二男で、高鍋で修業後、古江で紺屋を開き、衣服やカヤなどのあい染めを生業とした。大正末から昭和初めに大漁旗も手がけるようになった。これは北浦の漁法が大敷網になり、漁獲量が増える時期に重なる。



のれんの製作。伝統技法を伝える吉田さん

儀男さんは五六（昭和三十一）年から延岡や京都、福岡などで十五年間修業、七〇（同四十五）年家業を継いだ。当時、日本は高度経済成長の時代。食生活も豊かになり、北浦の養殖ハマチは全国から注文が殺到、イワシは豊漁が続くなど北浦漁業の最盛期であった。大漁旗の注文も相次いだ。

絵模様はえびす、タイ、鶴亀、富士山、朝日など縁起がよいものや、大空を飛ぶタカ、打ち寄せる波など勢いのあるものが中心で、鮮やかな色彩で描かれる。大漁旗のほか儀男さんは五月節句の武者のぼり、のれん、各種の旗なども手がけ、今でも地元はもとより県内、大分県からの注文が多い。

前田博仁